

キラリ！ 輝く人たち

地方創生や地域活性化が叫ばれる^{きつこん}昨今、元気な高齢者の存在が地域を支えていると言っても過言ではありません。

3月下旬、古河老人クラブ連合会女性委員会の内田委員長と関副委員長が市役所を訪問。市内小学校に手作りの雑巾3,000枚を寄付していただきました。

日ごろから子どもやお年寄りに温かい手を差し伸べる二人に話をうかがいました。

家の手ぬぐいが目に留まり

丈夫に縫われ、簡単には解れない^{ほつ}手作りの雑巾。その一つひとつが、どの家庭にもあるごく普通の手ぬぐいでできています。「自分たちのやりがい^{だれ}を求めるだけでなく、誰かの役に立つ活動がしたかった」と話す内田さん。児童生徒の登下校時の見守り活動を行う中で「何かもう一つ子どもたちの役に立つ活動をしたい」との思いが増していきました。

「お金をかけずに無理なくできることはないだろうか。そう考えていたある日、家にある手ぬぐいに目が留まったんです」と話してくれたのは関さん。「私たちが子どもたちのころは手縫いの雑巾を親が作ってくれました。今度はそれを私たちがする番。忙しいお母さん



▲手縫いの雑巾には子を持つ母親としての思いやりが詰まっています

あたたかい地域をつくりたい

古河老人クラブ連合会女性委員会



▲菅谷市長、佐川教育長に手作りの雑巾を手渡す内田幸子委員長(中央右)と関啓子副委員長(右)

たちを少しでも助けられれば」と活動のきっかけを教えてくださいました。

未来ある子どもたちのために

二人を含む女性メンバーの発案で平成26年に始めた雑巾の手縫い。市内の老人クラブ全153団体の協力もあり、寄付した雑巾は2年間で8,400枚にのぼります。「子どものころ、母親が作ってくれた雑巾を持って学校に通ったのを思い出しながら縫っていました」と振り返る関さん。「気持ちを込めて縫いました。子どもや親御さんの一助になればうれしい」と話す表情からは、子どもを思いやる女性・母親としての愛情があふれ出ていました。

地域の輪を大切にしたい

高齢者の交通安全や児童生徒の見守りなど、地域に根差したさまざまな活動を精力的に行う女性委員会。「雑巾づくりは一区切りですが、これからも地域の輪、人と人とのつながりを大切にしたい取り組みをしていきたい」と口をそろえます。

「一人暮らしのお年寄りがより安心して暮らせるよう、こまめな目配りや近所同士で助け合える^{きずな}絆を作っていきたいです」という二人の穏やかな^{まなざ}眼差しが印象的でした。